

バスケットボールにおける世界の戦術動向 —2000年シドニーオリンピックから2002年世界選手権にかけて—

A study of world tactics trend in Basketball
-from the Sydney Olympics in 2000 to the world championship in 2002-

鈴木 淳

Jun SUZUKI

保健体育講座

(平成18年 9 月28日受理)

1. 研究の目的

バスケットボールにおける世界大会は、オリンピック競技大会と世界選手権大会となっている。1992年バルセロナで開催されたオリンピック競技大会において、プロ競技者の参加が認められて以来、National Basketball Association (NBA) に所属する選手が出場するなどして、バスケットボールの世界大会は注目度を増している。

しかしながら、我が国における世界大会の関心度は、出場国となっていないために低く、したがって、戦術分析を行った事例は日本バスケットボールコーチコミッティーが行ったもの¹⁾のみとなっている。また、世界大会以外の戦術分析²⁾³⁾⁴⁾はいくつかあるものの、それらの分析結果を比較して戦術の動向を明らかにしてものは見当たらない。

そこで、本研究では、日本バスケットボールコーチコミッティーが2000年シドニーで開催されたオリンピック競技会において戦術分析を行った結果を基にして、2002年にインディアナポリスで開催された世界選手権大会の戦術分析を行うと共に、2000年から2002年にかけての世界の戦術の動向について明らかにすることを目的とした。

2. 研究の方法

日本バスケットボールコーチコミッティーが、2000年シドニーで開催されたオリンピック競技会（以下：SDN）において戦術分析を行った結果から、SDNにおける戦術の特徴について明らかにした。調査報告書は、総括（全体的な傾向について）と上位 4 チームの分析から成り、各チームの分析は出場国が異なっているため、総括のみを対象と

して戦術の特徴及び2002年世界選手権大会（以下：IND）を分析する際の観点を作成した。そして、それらの観点を基にINDの戦術分析を行った。

3. SDNにおける戦術の特徴

日本バスケットボールコーチコミッティーの調査報告書から全体を通しての戦術の特徴をまとめると表 1 のようになった。

表 1 SDNにおける戦術の特徴

身体能力	○ いずれのチームも平均身長が190cm台後半、200cmを超えるチームも半数ある。
	○ 長身者が中・長距離のシュートを打ち、フォワード的にプレーしてくる。
	○ かなり激しい身体接触が随所にみられる。
チーム戦術	
＜速攻＞	○ 速攻においてアウトナンバー攻撃できない場合には、そのまま途切れずにアーリーへ移行することで、連続的にシュートチャンスを準備しているチームが多い。
	○ シュートクロックが24秒に移行することから、今後その傾向がさらに強まるのではない。
＜セットオフense＞	○ フレックスやシャッフルなどの 5 人が動くモーションのオフenseをベースに採用しながらも各チームともに、「どこで」「誰に」ボールを持たせたいのかというねらいが非常にはっきりしている。
	○ 5 人が動くモーションとしては、シャッフルを採用しているチームが非常に多かった。
	○ 両側のローポストとハイポストの 3 角形で、クロスコートスクリーンからダウンスクリーンへ移行するスクリーンの連続を多用するチームが多かった。
	○ ディフェンスのディナイやプレッシャーが厳しく思うようなパッシングやモーションができない場合、シュートクロック残り僅かでのシュートチャンス作りには、トップやウイングでのピックが多用されていた。
	○ ノーボールのスクリーンでは、シングルスクリーンだけでなく、ダブルスクリーンやスタガードで時間差をつけたスクリーンをセットするケースが非常に多く見られた。
	○ また、スクリーンをしつこく何回も何回も連続させながらチャンスを作るというチームが多かった。
＜ディフェンス＞	
	○ ハーフコートでのプレッシャーマンツーマンが基本であるが、ガード陣は常にオールコートでボールに対してプレッシャーをかけていた。
	○ バックコートが 8 秒ルールに変更されることを考えると、今

個人戦術	後もバックコートでのプレッシャーやトラップなどの仕掛けは増えていく傾向があると考えられる。
	○ガードのボールハンドリングが高い世界レベルでは、オールコートのディフェンス展開は難しい。
個人戦術	○ハーフコートでのディフェンスでは、特にスクリーンの対処について十分に訓練されている傾向がみられた。
	○相手ディフェンスがついている状態でシュートを打てる個人技術が必要不可欠になる。
個人戦術	○シュートについてはゴール近辺でディフェンスにブロックされない技術が非常に重要。
	○大型の選手では、ブロックされないような高い打点でのシュートや、素早いターンからのクイックシュートが多く見られた。

4. INDを分析するための観点

表1からINDを分析する際の観点を作成した(表2)。

SDNからINDにかけては、いくつかのルール改正が行われている。主なものとしては、シュートクロックが30秒から24秒になり、それに伴ってバックコートからフロントコートへのボール運びが10秒から8秒になったことがある。

このため、SDNとINDでは単純に比較することが出来ないことになるが、SDNの報告書では、ルール改正に伴う推測がなされており、それらも観点として加えた。ルール改正による戦術変化の推測とは、シュートクロックが24秒に移行することによって連続的にシュートチャンスをつくるアーリーオフェンスを採用するチームが増えるのではないかというものと、8秒ルールに変更されることによってオールコートディフェンスの傾向が強まるのではないかというものである。

表2 INDを分析する際の観点

身体能力	▽各チームの平均身長はどのようなになっているか。
	▽長身者(210cm以上)のプレイスタイルはどのようなになっているか。
チーム戦術	▽身体接触はどのような状況で起こっているか。
	〈速攻〉 ▽アウトナンバー攻撃できない場合の速攻としてはどのようなパターンがあるか。 ▽シュートクロックが24秒に移行したことによって速攻の状況に変化があるか。
個人戦術	〈セットオフェンス〉 ▽5人が動くモーションが主体か、1対1が主体か。 ▽5人が動くモーションとしては、どのようなパターンを採用しているか。 ▽ピックアンドロールはどのような状況で使用されているか。 ▽ノーボールのスクリーンはどのような種類があるか。また、スクリーンの連続性はあるか。
	〈ディフェンス〉 ▽オールコートのディフェンスが主体か、ハーフコートのディフェンスが主体か。 ▽8秒ルールに変更されることによるディフェンスの変化はあるか。
個人戦術	▽シュートの技術にはどのようなものがあるか。
	▽長身選手のゴール近辺におけるプレイスタイルはどのようなになっているか。

5. INDにおける戦術の特徴

(1) 出場国の平均身長

出場国の順位、平均身長、体重、年齢は表3に示すとおりである。

平均身長は190cmを超えるが、190cm前半のチームが3チームある。そのうち2チームはアフリカのチームである。SDNにおいてもアンゴラは平均身長が190cm台であり、アフリカ勢の一つの特徴と考えられる。

第4位に入ったニュージーランドは、スタートの平均身長が193.0cmと低い。しかしながら、身長が低い選手をインサイド、身長が高い選手をアウトサイドにおくという工夫がみられた。また、身体接触にはかなり強いものがあり、身長差を埋めるための余地は世界大会レベルでも残されていると考えられる。

表3 IND出場国の平均身長、平均体重、平均年齢

	Team		HGT(cm)	WGT(kg)	Age
			[Starter]		
1	ユーゴスラビア	YUG	205.7	×	25.8
2	アルゼンチン	ARG	199.3	104.2	25.8
3	ドイツ	GER	202.5	×	25.6
4	ニュージーランド	NZL	196.3	95.3	25.8
5	スペイン	ESP	199.0	95.3	25.1
6	アメリカ	USA	200.5	102.8	25.5
7	プエルトリコ	PUR	198.3	103.3	28.0
8	ブラジル	BRA	200.0	92.1	24.1
9	トルコ	TUR	200.6	100.3	
10	ロシア	RUS	201.4	98.2	
11	アンゴラ	ANG	193.5	94.0	
12	中国	CHN	201.5	101.6	25.2
13	カナダ	CAN	196.8	95.1	
14	ベネゼーラ	VEN	197.1	×	
15	アルジェリア	ALG	193.7	93.0	
16	レバノン	LIB	192.0	94.0	27.8

(2) 長身者のプレイスタイル

表4は、身長が210cm以上ある選手のシュートや得点の状況についてまとめたものである。21名の内、3ポイントシュートを10本以上打った選手は、6名であった。その中で5名の選手が、1ゲームの得点アベレージが10点以上であり、チームの中心選手で活躍していることが分かる。3ポイントシュートを打つことがなく、1ゲームの得点アベレージが10点以上の選手は2名しかいない。これらのことから、チームの中心選手として活躍する長身選手のほとんどは、アウトサイドシュートも打つことが出来る選手であることが分かる。

(3) 身体接触

どのような場面で身体接触が起こっているか観察したところ、インサイドに進入するオフェンスをボディチェックで止める際、ピックをセット

表4 長身選手のシュートや得点の状況

Name		HGT (cm)	WGT (kg)	G	Min.	2P				3P				FT			Pts	Avg	
						M	A	%	M	A	%	M	A	%					
Rafael Araujo	BRA	210	120	4	33	7	/	13	53.8	0	/	0	0.0	3	/	7	42.9	17	4.3
Sandro Varejao	BRA	210	120	9	215	26	/	69	37.7	0	/	2	0.0	8	/	10	80.0	66	7.3
Yao Ming	CHN	226	115	8	225	54	/	72	75.0	1	/	1	100.0	57	/	76	75.0	168	21.0
Menke Batere	CHN	210	131	8	173	30	/	53	56.6	5	/	11	45.5	29	/	36	80.6	104	13.0
Patrick Femerling	GER	214	119	9	205	19	/	49	38.8	0	/	1	0.0	24	/	32	75.0	62	6.9
Robert Maras	GER	215	120	5	35	9	/	14	64.3	0	/	0	0.0	6	/	7	85.7	24	4.8
Dirk Nowitzki	GER	213	111	9	281	49	/	108	45.4	12	/	42	28.6	82	/	89	92.1	216	24.0
Joseph Vogel	LIB	212	119	5	175	33	/	68	48.5	3	/	20	15.0	8	/	14	57.1	83	16.6
Daniel Santiago	PUR	216	125	9	235	47	/	75	62.7	0	/	0	0.0	16	/	28	57.1	110	12.2
Alexander Bachminov	RUS	212	109	7	83	8	/	17	47.1	0	/	0	0.0	8	/	10	80.0	24	3.4
Nikita Morgunov	RUS	210	115	7	133	11	/	36	30.6	9	/	13	69.2	10	/	10	100.0	59	8.4
Alexei Savrasenko	RUS	217	110	8	180	32	/	47	68.1	0	/	0	0.0	7	/	11	63.6	71	8.9
Pau Gasol	ESP	214	112	9	271	51	/	79	64.6	6	/	18	33.3	52	/	76	68.4	172	19.1
Huseyin Besok	TUR	212	116	7	117	15	/	39	38.5	0	/	1	0.0	13	/	16	81.3	43	6.1
Mehmet Okur	TUR	210	111	8	216	42	/	74	56.8	7	/	15	46.7	33	/	45	73.3	138	17.3
Asim Pars	TUR	212	118	5	51	5	/	11	45.5	0	/	0	0.0	0	/	2	0.0	10	2.0
Raef LaFrentz	USA	211	109	6	63	12	/	23	52.2	2	/	8	25.0	1	/	1	100.0	31	5.2
Jermaine O'Neal	USA	211	109	8	155	25	/	49	51.0	0	/	0	0.0	8	/	19	42.1	58	7.3
Zarko Cabarkapa	YUG	210		5	16	3	/	4	75.0	0	/	0	0.0	2	/	2	100.0	8	1.6
Vlade Divac	YUG	216	118	9	194	28	/	54	51.9	2	/	4	50.0	16	/	32	50.0	78	8.7
Dejan Koturovic	YUG	210		8	115	21	/	42	50.0	0	/	0	0.0	11	/	17	64.7	53	6.6

するオフェンスを外に押し出そうとするとき、ボールがないところのスクリーンでみられた。

また、ボールマンのボール運びの際にも激しい身体接触があった。中国は、平均身長は世界レベルであるが、ガードのボール運びがディフェンスの激しい身体接触に耐えることが出来ず、身長差の有利さを生かすことが出来なかった。

ショットクロックが24秒、フロントコートへのボール運びが8秒になり、ボール運びへのプレッシャーはさらに強まったと考えられる。今後は、ボールを運ぶガードの資質として、スピードがあり、かつ身体接触に耐えることが出来る体格、プレッシャーをかけられた中でドリブルやパスが出来る能力が求められると考えられる。

身体接触が強いチームとしては、アルゼンチンとニュージーランドが挙げられる。アルゼンチンは平均体重が104kgと出場国の中でトップのことから、体格の大きさが分かる。これらのチームは、平均身長が200cmに満たないながらベスト4に入っていることから、体格が大きく、身体接触を強くすることは、身長差を補う可能性があることを示しているものと思われる。

(4) 速攻の状況

アーリーオフェンスを採用しているチームはほとんどなかった。唯一、ニュージーランドが2-3の配置からいくつかのパターンを行っていた。

ほとんどのチームは、アウトナンバー攻撃が出来ない場合に、ボールを持っているガードにピックをかけ、そのままオフェンスを継続していた。図1は速攻でのピックについて示したものである。

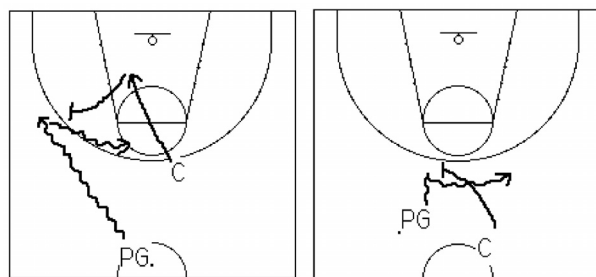


図1 速攻でのピック

(5) セットオフェンス

個人技のレベルが際だって高いチーム、または数人のポイントゲッターがいるチームは、1対1を中心に攻撃する傾向がみられた。ユーゴスラビアやアメリカなどがこれにあたる。それ以外のチームは、チームとしての動きを連続したり、スクリーンを用いたりしていた。

5人が動くモーションとしては、フレックス(図2)が多かった。このフレックスの特徴としては、オフェンスの入り方に各チームの工夫(図3)がみられること、スクリーンを連続させるものの、ディフェンスの状況をみながらゆっくりカットするのではなく、予め用意されたディフェンスの状況に応じたカットのオプションを素早く行うことがある。

ディフェンスのプレッシャーが厳しく、思うようにパッシングやモーションが出来ない場合やシュートクロックがわずかでシュートチャンスづくりにトップやウイングでのピックが多用された。代表的なピックの位置は、ウイングとトップである(図4)が、最初からそこにピックをセットするのではなく、そこに単独に飛び出す、またはス

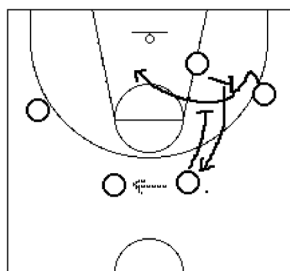


図2 フレックス

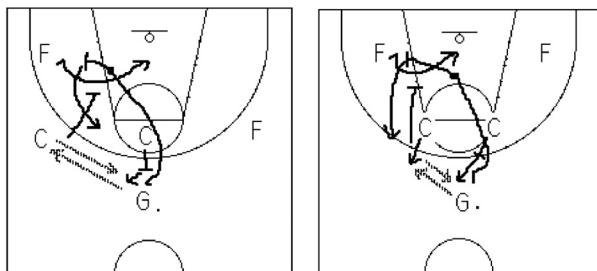


図3 1-3-1と1-2-2の配置からのフレックス



図4 代表的なピックの位置

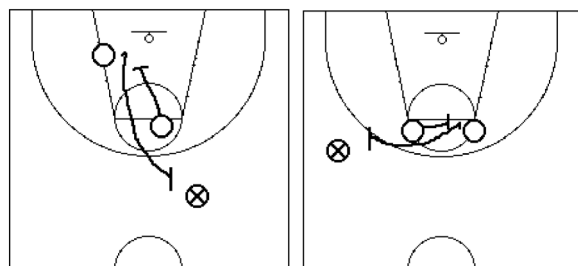


図5 スクリーンを利用したピック

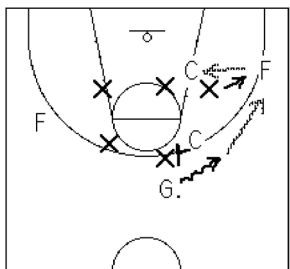


図6 ゾーンディフェンスに対するピック

クリーンなどを利用して飛び出してピックをセットする場面(図5)があった。また、ゾーンオフenseでもピックをかける場面(図6)があった。

(6) ディフェンス

ハーフコートでのマンツーマンディフェンスが

基本であった。ボールを運ぶガードに対しては、オールコートでプレッシャーをかけ、これに対してオフェンス側はピックをセットしたり、ドリブルのコースに入ってディフェンスの邪魔をしたりする場面が多くみられた。

ゾーンディフェンス、オールコートのプレスディフェンスをメインにしているチームはなく、ゲームの流れを変えるために一時的に用いていた。

フロントコートへのボール運びが8秒になったことによる、ディフェンスの変化はほとんどないと考えられる。世界レベルにおいては、ディフェンスをオールコートに広げることは非常にリスクが高いものと考えられる。

(7) 個人戦術

ディフェンスのショットブロックの技術が発達しているため、ブロックをされないでシュートを打てる技術が非常に重要視されていると考えられる。

小型選手がインサイドでシュートを打つことは難しいが、スペインのナバーロなどはドライブからステップをきりながらクイックにスクープシュートを打つ技術を持っていた。また、ブレイクでレイアップシュートを打つ際も、ワンステップでシュートを打つ、ステップのタイミングや方向を変えるなどして、シュートブロックのタイミングをはずす工夫がみられた。

インサイドでのシュートはベビーフックがよくみられた。ただし、ベビーフックを簡単に放つことができるため、インサイドでボールを受けてからシュートに至るまでの技術は重要視されていないように感じた。そのような中で、中国の2人のインサイドプレイヤー、Yao Ming (226cm)とMenke Batere (210cm)はボールを受けてから、シュートに至るまでの攻撃技術が、ディフェンスの状況に応じて選択されていた。身体的な特徴が世界のトップクラスであることは間違いないが、インサイドの攻撃技術としても世界のトップクラスであると思われる。

6. まとめ

SYDからINDにかけての戦術の変化についてまとめると以下ようになる。

速攻では、アーリーオフェンスによって連続的かつ計画的にシュートチャンスをつくるのではなく、ピックによってシンプルなプレーから時間をかけずに得点を狙おうとする傾向があった。セットオフェンスでは、個人技のレベルが際だって高いチ

ーム、または数人のポイントゲッターがいるチームは、1対1を中心に攻撃する傾向がみられるという部分では大きな変化はないが、ピックを使う場面が多様になり、また動きを入れてピックをセットするなど、ピックが使われる場面が多くみられた。ディフェンスでは、フロントコートへのボール運びが8秒になっても、ディフェンスをオールコートに拡げることはなく、ハーフコートのマンツーマンという傾向は変わらなかった。

7. 文献

- 1)日本バスケットボールコーチコミッティー情報委員会：シドニーオリンピック戦術報告，バスケットボールコーチング，第4号，35-57，2000
- 2)大神訓章：全日本女子バスケットボールチームの戦力分析，バスケットボールコーチング，第5号，74-95，2001
- 3)内山治樹：世界トップレベルにおけるバスケットボールチームの集団戦術行動に関する研究-第18回アジア女子選手権大会のゲーム分析-，スポーツ方法学研究，第14巻1号，103-115，2001
- 4)内山治樹：バスケットボール競技における集団戦術としての「トランジション」に関する研究-第18回アジア女子選手権大会のゲーム分析-，筑波大学体育科学系紀要，第24巻，107-120，2001